

氏名(国籍)	蔣 垂 東 (中国)		
学位の種類	博士(言語学)		
学位記番号	博 甲 第 1,770 号		
学位授与年月日	平成 10 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	文芸・言語研究科		
学位論文題目	『日本館訳語』の日本語史的研究		
主査	筑波大学教授		林 史 典
副査	筑波大学教授	文学博士	北 原 保 雄
副査	筑波大学教授	博士(文学)	湯 沢 質 幸
副査	筑波大学助教授		大 倉 浩
副査	筑波大学助教授		矢 澤 真 人

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

キリシタン資料などのように、外国人が母語を表記する文字で日本語を記録した<外国資料>は、外国語の音・語彙・文法などとの対照・比較によって過去の日本語を解明できる可能性を有する点で、日本語の歴史的資料としてきわめて重要な意味を持っている。本論文は、そうした<外国資料>の中から、未解明な問題の多い代表的中国文献『日本館訳語』を取り上げ、その成立・基礎音系・音訳日本語等に関する問題点を論じたもので、次のような構成をとっている。

はじめに (研究の対象・目的・概要)

第 1 章 日本語史料としての中国資料

第 2 章 『日本館訳語』の基礎研究

第 3 章 ロンドン大学本の独自の用字法

第 4 章 『日本館訳語』の基礎音系

第 5 章 音訳に反映された日本語の音韻

第 6 章 音訳に反映された日本語の語彙

第 7 章 『琉球館訳語』との関連

おわりに (本論のまとめ・今後の課題)

資料 I 『日本館訳語』解読試案

II 『日本館訳語』諸本校異

引用・参考文献

「はじめに」では、まずこの研究の対象と目的および意義、本論文の構成と各章の概要が述べられている。

第 1 章は、『日本館訳語』をはじめ『鶴林玉露』『書史会要』『日本国考略』『日本一鑑』『日本風土記』等の<中国資料>に関する基礎的考察で、文献ごとに過去の研究成果を検討・吟味しながら、日本語史の資料としての位置づけを試みている。章末では、『皇明馭倭録』などのような未報告資料の調査にもとづいて、「日本寄語」の系統が明らかにされている。

第 2 章は、『華夷訳語』の諸本、『日本館訳語』の成立、『日本館訳語』のテキスト、ロンドン大学本の識語等

に関する考察である。『日本館訳語』が含まれている『華夷訳語』丙種本の著者や成立時期について先行研究を検証するとともに、『日本館訳語』成立解明の手がかりとなるロンドン大学本の識語について詳細に調査・吟味し、この識語の信憑性がきわめて高いこと、またそれが、『日本館訳語』を明の会同館で編集されたものと推定する有力な傍証となり得ること、したがってこの識語は、他の伝本に対するロンドン大学本の優位性を証明するものであること等を主張している。

第3章では、第2章をふまえてロンドン大学本独自の用字法が検討されている。『日本館訳語』諸本中の最善本と目されるロンドン大学本には、モに「莫」（他本「木」）、トに「多」（他本「都」）、スに「司」（他本「唆」）を用いるなど、独自の用字法が存在するが、これは曖昧になりがちなウ段とオ段、イ段とエ段の区別がより明確になされるよう意図的に行われた改変であること。また、このような意図も徹底されておらず、稀には誤った改変が行われている例もあること等を明らかにしている。

第4章は、音訳漢字の基礎音系に関する考究である。漢字で音訳された日本語を解読するには、音訳の基礎となっている中国語の音系を明らかにしなければならない。従来は、それを専ら『中原音韻』（1324年成立）の音系と見なしてきたが、『中原音韻』から『日本館訳語』までの約200年にはさまざまな音韻変化が発生しており、『日本館訳語』の音訳漢字を統一的に説明するためには、その成立年代により近い中国北方音を反映する『韻略易通』（1422年成立）、『重訂司馬溫公等韻図経』（1606年成立）などの韻書・韻図をも参照すべきである、というのがこの章の要点である。そうした結論の正当性は、「阿味 牙非」「楡樹亦倭那急」など、未解明だった諸例を明快に解決することによって証明されている。

第5章では、音訳された日本語の音韻について論じている。まず、「四つ仮名」に関しては、ジ・ズには摩擦音系の字母を多用するのに対して、ヂ・ヅには破裂音系・破擦音系の字母を混用することを指摘し、そうした事実は、ヂ・ヅに破擦音化が発生しているものの、ジ・ズとの対立—就中、ズとヅの区別—はなお保たれていたことを示すものと結論している。ハ行子音については、ハ行音に当てられた字母を調査することによって、その用法が全体として日本語史の通説によく符合すること、したがって当時のハ行子音が両唇摩擦音だったことを証することを明らかにしている。エおよびエ列母音については、やはり音訳漢字の分析から、基礎音系では [-e] と [-je] の書き分けが困難であったことを明らかにし、それにもとづいて従来の解釈を批判している。

第6章では、音訳された日本語の語彙について考察し、訳語の中には編者によって作られたところの日本語には実在しない語（漢製和語）が含まれていることを指摘することによって、『日本語訳語』の性格の一面を明らかにしている。例えば、「椿樹」を「法祿那急（ハルノキ）」とするのは、中国語で「椿」が「春（＝ハル）」と同音であることによるものであり、同様の例が「珊瑚 牙馬那答馬（ヤマノタマ）」（「牙馬」は「珊」と同音の「山」の和語）、「琥珀 它喇那答馬（トラノタマ）」（「它喇」は「琥」と同音の「虎」の和語）などにも認められることを示している。

第7章では、『日本館訳語』と密接な関係にある丙種本『琉球館訳語』が取り上げられ、両者の関連が論じられている。すなわち、両者は従来その共通点に注目されることが多かったが、収録語数・門数・分類法・同一見出し漢語の音訳法・同一音訳漢字の用法などに多くの相違が存在すること、『琉球館訳語』には丙種本の他に従来実態が明らかにされていない丁種本『琉球土語』が存すること、丁種本は丙種本より『中山伝信録』に近いこと等が明らかにされている。

「おわりに」では、本論のまとめとして各章の要旨が統合的に示され、さらに残された課題が箇条的に述べられている。

## 審査の結果の要旨

『日本館訳語』は、主要な中国資料として中世日本語資料の一つに数えられてきたが、未解明の事例や本格的

研究を要する問題も少なくなかった。本論文はこうした点に着目し、次のような注目すべき成果をあげている。

一つは、『日本館訳語』をはじめとする中国資料のテキストに関する研究で、『皇明馭倭録』『倭情考略』『籌海重編』や丁種本『琉球土語』など、従来詳細が明らかにされていなかった諸本を北京故宫博物院図書館・北京図書館・清華大学図書館等に調査し、新たな事実を加えたことである。特に、『皇明馭倭録』などのような未報告資料の調査にもとづいて、「日本寄語」の系統を明らかにした点、丁種本『琉球土語』を調査して丙種本『琉球館訳語』との関連を解明した点が高く評価される。

次に、基礎音系を専ら『中原音韻』に依ってきたこれまでの方法を批判し、『日本館訳語』の成立により近い中国北方音の音韻資料『韻略易通』『重訂司馬溫公等韻図経』の音系にもとづいて、いくつもの未解説語を解説したことである。その批判は正当で、それにもとづく考察の結果は従来の研究を大幅に改めるものである。

基礎音系に関する考察とそこから導かれた成果を踏まえた日本語音韻史に関する研究にも、評価すべきものが多い。四つ仮名・ハ行子音・エおよびエ列母音についての言及は、これまでの常識に詳細な事実を加え、あるいは部分的に認識を改めさせるものである。

『日本館訳語』の訳語には、編者によって捏造されたところの、日本語には実在しない語（漢製和語）が含まれていることを指摘した点も、この文献の性格を捉えるうえできわめて重要である。

個々の事例や現象の言語史的解釈にはさらに考究を深める余地があり、残された課題にも大きな問題が含まれているが、全体として本研究には従来の研究水準をはるかに越えるところが多く、本論文は博士（言語学）の学位論文として高く評価されるべきものである。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。